

祝 甲子園出場!!

校 長 武井 正明

高校野球で1年生投手が夏の大会で登板するほどプレッシャーの掛かることはない。

あの桑田真澄がPL学園1年時、登板する前のトイレで一緒になった3年生に「あ〜あ俺たちの夏はもう終わりだあ…」と聞こえよがしに嫌味を言われたという。そう、自分の投球次第で先輩たちの最後の夏を終わらせてしまうかもしれない。その責任は重大だ。

吉中を今春卒業したばかりの日本文理高1年浅井隼君が準々決勝、決勝戦で登板、特に決勝戦では強豪帝京長岡打線を118球2失点に抑えて完投。解説の佐藤和也新潟医療福祉大監督も大絶賛だった。

彼はかつて桑田真澄が感じたプレッシャーを、既に2度も経験し自力で乗り越えた。もうあっぱれとしか言いようがない。たいしたものだ。

私は隼（呼び捨てゴメン。やっぱり「浅井君」ではないな）のマウンドでの雄姿を画面越しに見て、昔の、ある高校球児と重なって見えた。

それは1977年甲子園「バンビ」の愛称で大活躍した、東邦高の坂本佳一投手だ。野球中継がバックネット裏からの画が、センター後方からの現在の画に切り替わった頃…。

力みのないフォームから伸びのある真っ直ぐとカーブがコーナーにビシッと決まる。絶妙な配球、安定感あるマウンド裁き、淡々と表情ひとつ変えず試合を作る。

決勝戦で延長10回東洋大姫路に負けた。サヨナラ本塁打となった最後の打球を、グラブを腰に当てライト方向に遠い眼で追う姿がカッコよかった。私は当時小学5年。バンビ坂本にあこがれた。その時の記憶が、隼君の投球を見ていると蘇ってくる。

桑田真澄はそれから5回連続甲子園出場、そして巨人軍入団。大きな故障なく野球選手として階段を着実に上り、通算173勝を挙げた。

坂本佳一はその後肩を壊し、法政大で野球を続けたものの、苦しい選手生活を余儀なくされ突然野球界を去った。彼は2018年「レジェンド始球式」で甲子園に戻ってきた。

隼君のマウンドでの様子から慢心は伝わってこない。頼もしさや精悍さはぐっと増したが、きっと野球を離れれば、吉中時代の屈託ない彼のままだろう。ずっと皆から愛される人物でいてほしい。とにかく無理をしすぎないように。怪我なく思い切り高校野球を満喫してもらいたい。君の野球人生は、まだまだ始まったばかりなのだから。

ぜひ甲子園に応援に行きたい。いいなあ隼…もう甲子園の土踏むんだ。羨ましいなあ。ただこちらは野球部の、卓球男子個人や体操男子の北信越大会もある。教え子達の活躍に、早くもワクワクソワソワの気が気でない夏になっている。何とも嬉しい悲鳴だ。

さあ吉中野球部の後輩たちも、隼君に続け〜っ!!